

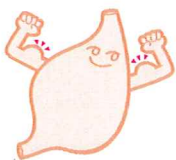


Q：胃がんの「ABC検診」というのは何ですか。

A：内視鏡検査でなく血液検査による胃がんのリスクスクリーニングのことです。胃がんそのものを見つけ出す検査ではありませんのでご注意ください。

胃がんの多くは、ピロリ菌感染によって起こる慢性萎縮性胃炎が進行することから発生します。そこでピロリ菌の有無と、胃粘膜萎縮の程度に相関するペプシノーゲン値の組み合わせで4群に分類します。A群(ピロリ菌-)、ペプシノーゲン(+)、胃がん発生の危険性は低いです。B群(ピロリ菌+)、ペプシノーゲ

ン(-)は胃がん発生のリスクあり。C群(ピロリ菌+)、ペプシノーゲン(-)は萎縮が進んでおり胃がん発生のリスクが高いです。D群(ピロリ菌-)、ペプシノーゲン(+)は萎縮が高度であり胃がん発生のリスクが極めて高いです。D群はピロリ菌が陰性ですが、萎縮が進んで胃粘膜が



荒廃し、ピロリ菌さえ住めなくなつて陰性化した状態と考えられ、ピロリ菌の有無だけでなく胃粘膜萎縮の進行でリスクは高まるのです。

(岡田俊一・おかだ内科クリニック院長、甲府市北口2-9-12、ニッコー北口駅前ビル2F)

☎0555・2888・1801